
マブラヴ Unlimited - 英雄の侵略者 -

水川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マブラヴ Unlimited - 英雄の侵略者 -

【Nコード】

N1807R

【作者名】

水川

【あらすじ】

3人目の水川司の訪れる世界。それはBETAという侵略者の手によって人類が減びようとしている世界であった。侵略者の圧倒的物量に苦しみ追い詰められていく人類、その圧倒的物量に真正面から挑めるだけの力を持った存在。その存在は人類にとっての希望になるのか、それともさらなる絶望になるか。

あいつゆうきのおときはなし。本来なら救われない世界。本来なら人類が負けてしまう世界。英雄という存在がいる事でどのような未

来を迎えるのか。

プロローグ（前書き）

3 作目となる作品です。

学園黙示録もバイオハザードも完結していないのに、何をやっているのかと。

オルタネイティブはよくあるのですが、アンリミテッドはあまり見かけなかったので書いていました。ゲーム自体はしたことなく、S
Sやゲーム動画などが情報媒体です。

では、どうぞ

プロローグ

プロローグ

『性懲りもなく、また別の世界に手を出してしまったよ。この世界もすごく有名だけど、意外と使われていない世界なんだよね。でも、ボクの箱庭である世界にすごく似ているんだ。あの無限螺旋にね。』

それを成したのがただの人間だって言うんだから、本当に人間って言うのは面白いよ。』

『さて、これから繰り広げられるのは、あいとゆうきのおとぎばなし。』

負けるとわかっていても、勝てないとわかっていても、苦しいとわかっていても挑みつづけた人間達の御話。

そんなおとぎばなしの世界にまた司くんを放り込んで、今度は「ある任務」を与えたんだ。その任務を遂行することが今回の司くんの役割さ。

なんの任務かって？ただ「あるもの」を育てて欲しいのさ。

さて、それでは開演だよ。題名は・・・そうだね。

ね。【マブラヴ Unlimited - 英雄の侵略者 -】、これがいい

はじまり、はじまり。』

プロローグ（後書き）

どうも。また無謀にも新たな作品に手を出してしまいました。

ヒロイツク・エイジのネタは元々「怪物王女」の能力で考えていたので、ある程度まとまっていた。そこに「青銅の種族」という物量があれば、BETA相手でも物量戦ができるのでは？と思いつきました。

私の作品の主人公は、ゾンビやらBETAやら、やたらと死亡率の高い世界に行くようです。加えて人外になっています。もつとも今回の主人公の力は今までの比ではなく強力ですが。通常戦闘で星を砕く・・・

この作品も完結目指して頑張りますので、どうかよろしく願います。

第一話 任務と現状とこれから（前書き）

ナイアさんの出会いをすっ飛ばしていきなり世界を渡りました。といっても、今回は現状把握ですが。

ご都合主義満載です。

では、ごじゆ。

第一話 任務と現状とこれから

第一話 任務と現状とこれから

どうも、水川司です。邪神に生み出された一般人です。他の自分たちはなにやら死亡フラグ満載の世界に放り込まれたみたいですけど、自分がどの世界に放り込まれたのが未だに特定出来ていません。ニアさんのサポートもないみたいですし。ただ、分かっている事は、地球があるという事です。

なぜ地球と分かるかというところ・・・今地球を見ているからです。

地球は本当に蒼いです。もう感動しています。そう、現在私は宇宙にいます。目の前にはテレビなどの媒体でしか見たことのなかった地球を直に見ているのです。

しかし、今私は宇宙船に乗っているのでもなければ、モビルスーツなどのロボットに乗っている分けでもありません。私は生身で宇宙空間にいるのです。

普通の人間が生身で宇宙空間にいられるはずはありません。宇宙服も着ていません。テキオー灯を浴びた覚えもありません。

そして・・・今の私の見た目は人間ではありません。

身体の大きさはイマイチ分かりませんが、少なくとも人間のサイズではなさそうです。

それよりも先にナイアさんからの任務を説明します。ナイアさんから受けた任務は、「彼ら」を育成・繁殖させる事です。一見簡単そうですが、育てるといふのはものすごく根気と忍耐が必要です、繁殖となるとそれを行う土地や環境も大切になってきます。ゲームのように、ただ説明を聞いて一定の行動をすればいいというのではないのです。でも、もともと私は何かを育てたり世話をしたりというのが嫌いではありません。立派に育てて増やしてみようと強く思っています。

尤も、今回育てる「彼ら」といふのが・・・「青銅の種族」と呼ばれる宇宙蟲なのです。

意外とマイナーなアニメなのですが、「ヒロイック・エイジ」に出てくる敵の蟲の軍団を育てる事が今回の任務になりました。（他の世界は「生き残る」ことが主な任務）

「青銅の種族」といふのは、有機・無機の組み合わせたハイブリッドな生命体であり、身体そのものを宇宙に適応させる事で宇宙に進出を果たした種族です。

そして、その任された「青銅の種族」は、一匹や二匹ではありません。私の後ろには100を超える「アリ塚」が浮いています。

「アリ塚」といふのは、「青銅の種族」である蟲たちが宇宙を移動する際の群れの事をいい、その実態は集合体です。その大きさは大陸くらいあります。数万から数千万。それ以上の蟲が集まっているとされています。

この蟲たちが安心して子作りのできる星を探して、そこに住まわせ

るのが最終目標です。

任務の事はこれくらいでいいでしょうか。最初に言っていた私の今の姿を説明します。

今の私は、「ヒロイック・エイジ」関係で予想のつく方もいるかもしれませんが、「英雄の種族」になっています。

「英雄の種族」というのは、人型ですが異形の怪物のような姿をしていて巨大。単独で宇宙空間を自在に飛び回ることが可能で、強大な攻撃力・頑強な肉体を持っています。その戦闘力は1体で人類や青銅の種族の艦隊を圧倒し、惑星すら破壊することが可能、という規格外な存在になっています。

そんな存在の私は「生命」を示す英雄「レルネーア」になっているようです。主人公の「絶対的存在」を示す「ベルクロス」の戦闘力には劣りますが、強靱な生命力とあらゆるものを崩壊・再生させる「猛毒にして万能薬」を持っている点からすれば、戦闘以外でも役に立つ力を持っているすさまじい英雄といえます。見た目は完全に悪役ですが・・・

現在の状況をまとめると、

? 今の自分は「英雄の種族 レルネーア」

? 味方は少なくとも10億を超える「青銅の種族」

結論：世界征服も可能な勢力です。

世界にも因りますが、ドラゴンボールやスーパーロボット系の世界でもない限り負ける理由がない存在です。

とにかくこの蟲たちを育てていくためにも安全でよい環境を準備しなくてはなりません。この場合、地球が一番手っ取り早いのですが、さすがに戸惑います。人類が誕生していない大昔ならそれほど気を病まなくて済むのですが・・・

とりあえず偵察アリを向かわせて情報収集から始めますか。情報は大切ですから。まずは地球と月の現状確認です。

無限螺旋の世界に降り立った英雄。彼はまだその世界である事を知らない。彼がこの世界のことを知ったとき、とる行動とは。

第一話 任務と現状とこれから（後書き）

偵察アリの情報は一度、上位アリに届いたのを司が受け取る形にしています。視覚情報も可能です。

現在、司はレルネーアに化身していますが、生身でも一応宇宙空間は大丈夫です。

ストックは全くない状態なので、出来上がったら投稿する形になります。なので、更新はこれも遅いと思います。すみません。

今日はもう一話と設定まであるので、どうぞ。

第二話 この世界は・・・（前書き）

第二話投稿です。

とりあえずここまで書きあげました。

BETAがいる世界はオルタの世界だ、っという固定概念があったのですが、アンリミテッドの世界でもありえるんですね。主人公の白銀武が1回目かそれ以降かによって変わるだけみたいです。

第二話 この世界は・・・

第二話 この世界は・・・

地球と月に放った偵察アリたちから情報が来た。偵察アリといってもそれほど長い距離を航行できるわけではないので、まず地球と月の偵察を命じていた。

そのアリからの情報で、とんでもないものが分かった。

地球に関してだが、まず人類は存在していて文明も高度である。情報からの推測でも20世紀くらいであろう。大陸の形もほとんど同じようであった。ただ、一番大きな大陸で見過ごせない情報があった。

ユーラシア大陸に当たるところには人類はほとんど住んでおらず、なにやら正体不明の生命体がいるということである。さらに月の情報にも似たような生命体がいることが分かった。おそらく地球と月にいる正体不明の生命体は同一種であろうと推測する。

その映像も来たので見てみると、なんともおぞましい姿をした生命体であった。ナイアさんの眷属じゃないのかと、思ってしまうような人外の姿をしていた。特に人間の口らしきものを持っているものは余計に気持ち悪い存在だった。

一体、地球はいつから魔術師や旧支配者の巣窟になったのであろうか。

現実逃避も其処までにして、この生命体について、思い当たるものが司の中にあつた。

Beings of the

Extra
Terrestrial origin which is
Adversary of human race

訳すと「人類に敵対的な地球外起源種」、略してBETA^{ペータ}である。

これはPCゲーム「マブラヴ オルタネイティブ」に出てくる敵生命体である。その脅威はとんでもない物量で相手に攻撃をし、この世界の人類を全滅まで追い詰めるほどの存在である。確か、世界人口が30パーセントまで減らされたとか。

とにかく普通の人間はあつけなく死んでしまう、そんな死亡フラグ満載な世界である事が確認されたのである。

だが、今の司は普通どころか常識外れな存在となっており、たとえ億のBETAが襲い掛かってきても一方的蹂躪をすることができるであろう。加えて、司の手元には「青銅の種族」というBETAの物量攻撃に正面から物量攻撃を挑める存在がある。蟲たちはアニメでは弱いイメージがあつたが、実際に宇宙進出を果たした人類の科学力を退けて地球を征服したという侮れない力を持っている。単独で大気圏突入に加えて飛行能力、腐食性ガスの火炎、テレポート能力にヘドロンの盾というシールド。ビーム兵器を量産した人類でさえ勝つ事ができなかつたところから見ると、BETAよりも遙かに格上の強さを持っているといえる。

「でも、そんな圧倒的な力を持って、ただこいつらを育てるだけでいいのか？」

これだけの力があれば、この死に行く世界を助ける事も簡単に出来

てしまう。「青銅の種族」の物量戦闘に加え、「英雄の種族」の力による圧倒的蹂躪。本来死ぬはずだった人たちを救う事ができる。しかし、司はまた別のことも考える。

「助けた人たちが自分に敵意を向けないとも限らない。」

圧倒的な力は恐れられる。そして、そんな力が必要なのは危険が存在するときであり平和になった世界では必要ない。

BETAを全滅させることができたとしても、今度は人類と戦う事になる可能性もないと言い切れない。むしろ、そうなる可能性の方が高いと思ってしまう。全世界共通のBETAという敵が居るにもかかわらず、其々の国の思惑が交差し、無駄に兵士たちが死んでいった場面がいくつもあった。そして、それはどんな世界でも共通してあった。この世界でもないと限らない。

自分さえ良ければ、自分だけは助かりたいと思うのが人間である。それは仕方のないことなのだが、そのために自分の家族となったこの「青銅の種族」の蟲たちを司の自己満足に巻き込んで、むざむざ死なせたくない。

まだ出会って少ししか経っていないが、これからこの世界で共に生きていくこの蟲たちが少し可愛く感じてきている。実際に、今数匹が司の周りにまとわりついて、じゃれ付いてきている。

元来の「お人よきな性格」と「家族を失う事の恐怖」が闘ぎあっている。

「とりあえず、日本に行ってみよう。年代とか自分で調べないとなんともいえないし。」

偵察アリによって大陸の形や生命体、文明などは把握できたが詳しい歴史などは分からない。日本の図書館などの公共施設でひとまず調べてみようと思う。いくら戦時中だからといって図書館などを潰

したりはしないであらう。

司は、蟲たちを一旦人工衛星から察知できないくらいに離れさせて地球に向かう事にした。万が一のことを考えて、蟲とテレパシーを取れるように、そしてテレポート能力のある蟲からすぐに戦闘できる蟲を送れるようにもした。これで一応は大丈夫であらう。

司は偵察アリからの情報を元に、日本の山奥に蟲のテレポートで送ってもらったことにした。化身したまま。

第二話 この世界は・・・（後書き）

普通なら人類を助けるために奔走するのですが、司は思いとどまってみました。

無償で手を貸せば、相手の都合で使い捨てにされる可能性も大きいと考えたからです。

実を言えば、人類がないほうが「青銅の種族」を育てるのに都合がいいのです。BETAを素早く潰して、蟲の樂園にする事も可能です。それが出来ないのは甘さがあるからなのですが。

後は設定だけあげます。

これからもよろしくお願いします。

設定（前書き）

ヒロイック・エイジの公式ホームページにオリジナル設定を加えました。

ご都合主義もありますが、よろしくお願いします。

設定

設定

? 水川 司

邪神によって生み出された一般人。自分が三人目だということは邪神から聞いた。前の2人が行った世界の事も。

性格は基本「お人好し」で世話好き。その性格から将来は福祉関係の仕事に就こうと考えていた。

この世界では22歳の大学生

見た目は「真剣で私に恋しなさい！」の島津岳人をすこしタレ目にして筋肉質でなくなったような容姿。つまり普通で微妙。鍛えれば強くはなる。特にモテルと言っわけではなく、性格で好意を持たれるタイプ。

裏切る事が嫌いで、義理堅い。また裏切られる事に恐怖感を持っている。そんな相手は容赦なく切り捨てるといった冷酷な性格も持っている。

「BETAのいる世界はマブラヴ オルタネイティブ Alternative」という固定概念があったため勘違いしている。アンリミテッド Unlimitedの知識はあるが、気付いていない。

? 能力

「英雄の種族」レルネーア

中でも最も強い再生力と、あらゆる物質を崩壊・再生させる「猛毒

にして万能薬」を持つ。

また、全ての物質とエネルギーが相互に連絡しあつて形成される「記憶」を読み取ることが出来、その記憶の再生と発展が可能。

『ヒロイック・エイジ公式ホームページより』

現在その力の全てを使うこなす事はできない。それは司自身が力を把握できていないため。

「猛毒にして万能薬」は崩壊させることや霧の形状を操る事はできるが、再生の力はうまく使えない。身体能力は問題なく使える。英雄の種族で最強と謳われたベルクロスと真正面から戦えるくらいの強靱な身体を持っているので、肉弾戦も強い。

化身したときの高さは推測40メートル。

これは作者のアニメからの推測である。ガンダムなどのモビルスーツは基本18メートル。「ヒロイック・エイジ」に出てくる戦闘ロボット オーガンはモビルスーツに比べてひとまわり大きい30メートルと推測。それよりもさらにひとまわり大きかったため、40メートルとした。

? 味方勢力

「青銅の種族」

有機・無機の組み合わせたハイブリッドな生命体。

極少数の固体のみが自我を持ち、圧倒的多数の自我無き個体を統御している。自我を持つ固体の中でも最高位にあるのが女王。女王の自我は主自我と呼ばれる。そして、主自我に対して基本的には従属

的であるものの、あくまで独立した立場である従自我を持つ個体、それを騎士と呼ぶ。それ以下の自我を持たぬ固体は実行体とよばれる。

女王も騎士も必要に応じて様々な実行体を生み出す事が出来る（その命令を発する事ができるという事で、自信が母胎となる事を意味しているわけではない）が、新たな自我を創生できるのは女王だけである。女王や騎士から見た実行体は自分の一部という意識。個体としての実体はもちろん持っているが、自分の制御下にある実行体全てを1まとまりで自身と感ずる側面もある。一方、特定の実行体に意識を集中すると、その身体に乗り移ったかのような感覚で行動する事も出来る。彼らはこれらを実体・全体・仮体と呼び、使い分ける。

彼らの科学文明が生み出した最大の功績は意識の信号化である。これにより思考の機械的伝送が可能となり、銀の種族のようなテレパシーを用いずとも、言語を遙かに超える高度なコミュニケーションが可能となった（このような技術は、高いテレパシー能力を持つ銀の種族の文明では生まれなかった）。

彼らのテクノロジーは自らの肉体に直接反映され、時と共にその体組織を拡張させてきた。つまり彼らにとって文明の進歩は彼ら自身の進化に等しい。人類が初めて相まみえたとき、大変に生物的な外観を持つ宇宙船や機動兵器と思っただそれは、青銅の種族自身の姿だったのである。

『ヒロイック・エイジ公式ホームページより』

水川司を生み出した邪神ナイアさんが育てる事を任せた。育てるといふよりも幼虫を安心して育てられる星を探す事が目的となる。月

や火星などより大気のある地球の方が育てるのに適していると思われる。

現在でも数億匹居て、BETAの物量戦闘に物量で挑むことが可能。戦闘力もBETAより上で、柔らかい関節や腹部以外は硬い外骨格に覆われているため、現在のマブラヴ世界の兵器の効果は薄い。

設定（後書き）

正直、チートこの上ない強さになってしまいました。

ガンダムなどで人類の質を上げることは多いのですが、別勢力が正面から物量で挑むのはあまりなかったので、「青銅の種族」を出しました。

マブラヴは有名なSSなので、私も頑張って完結を目指します。

これからもよろしくお願いします。

第三話 原作開始は2000年辺り、現在は・・・（前書き）

出来上がりましたので投稿します。

今回は軽い情報収集のみで短いです。また、時代の独自解釈 オリ
ジナル設定もありますので、ご容赦ください。

第三話 原作開始は2000年辺り、現在は・・・

第三話 原作開始は2000年辺り 現在は…

「ここが日本か。」

蟲のテレポートで日本の山奥に着き、すぐに化身を解いた。傍に情報を送ってきた偵察アリがいる。

「ありがとう。お前らはこのまま戻ってくれ。帰るときはまた呼ぶから。」

偵察アリとテレポート能力を持ったアリ（以後、輸送アリ）に言うと2匹のアリは消えた。

「化身を解いたのは初めてだけど、前の自分のままだな。」

現在、司の格好は前世？の自分が持っていた服装であった。丈の長い黒の皮ジャンパーに紺のフリース、黒の迷彩ズボン。ほとんど黒で統一された服装である。唯一、スニーカーは白である。

「そつえば、財布とかあるのかな？」

司はジャンパーのポケットを探る。このジャンパーはかなり大きめのサイズ（5L）なので、ポケットの容量も数も多い。

- ? 財布
- ? 携帯電話
- ? I-POD
- ? 腕時計
- ? ハンカチ
- ? ポケットティッシュ

「財布もそのままだな。ポイントカードは店がないから使えないだろうし、この世界の銀行はどうなっているんだろう。現金は1万円とちよつと。って、旧札になってる？」

一万円札の福沢さんはそのままだが、千円札はすべて漱石さんになっていた。携帯電話の方はなぜかアンテナが立っていたし、インターネットまで使うことが出来た。しかも、現実のサーバーに繋がっているらしく、Wikiまで見ることができた。邪神の細かな気配りであった。

「この携帯が一番重要になってくるかもな。ゲームの流れならともかく、歴史や細かいイベントはあまり覚えてないし。」

持ち物の確認を終えた司は、自分の身体能力の確認も兼ねて、山間部を抜けて街へ向かった。

街へ着いた司はスーパーの新聞販売コーナーに向かった。本当はコンビニを探していたのだが、見当たらなかったのである。

「どれどれ…1990年1月25日。確か原作が始まるのって2000年くらいじゃなかったっけ？えっと、ここは四国か。ここが無事という事はBETAの日本侵攻はまだされていない、か。」

新聞を読みながらこの世界の情報をまとめていく司。余談であるが、コンビニが見当たらなかったのは、まだそれほど世間では身近ではなかったからである。社会情勢もあるが、コンビニが本格的に全国に普及するのは2000年辺りである。

「あの、お客様。」

司が振り向くと、スーパーの店員がいた。

「何でしょうか？」

「申し訳ありませんが、新聞の立ち読みはご遠慮くださいませ。」

そう言われた司は一瞬何を言われたのか理解できなかった。今でこそ黙認されているが、この時代、立ち読みはあまり好まれておらず、注意をされることも珍しくなかったのである。

「す、すみません。」

司は謝り、その新聞を持ってレジに向かった。支払いの際、持っているお金が使えるかどうか慌てたが、問題なく使えたので胸を撫で下ろしたのであった。

現在、司は買った新聞を持ち図書館で情報の整理をしている。携帯の情報と照らし合わせながら、この世界の社会情勢をまとめたが、とても興味深いものであった。

この世界では、日本に原爆が落とされなかった。だが条件付き降伏となり、冷戦の関係でアメリカと同盟し戦後復興した。武家がそのままあり、自衛隊はなく軍隊のまま。征夷大將軍の位もまだある。宇宙進出を目指した影響で、科学の発展がすごい。そのためBETAと早期に接触した原因でもあるが。

現在、BETAのハイヴは12個。マブラヴのWikiによると今年インドにもう1つ出来るらしい。だが、日本からすればまだ危機感を覚えるほどではないだろう。まだBETAに脅かされていないからな。

だが、あと10年もしないうちに日本に押し寄せてきて、一週間で日本の半分が占領。3600万人が犠牲に。その中に主人公の白銀武と鑑純夏も含まれる。そして、「マブラヴ オルタネイティブ」が本格的に始まる、か。

「BETAさえいなければ、違う発展を遂げた日本の観光がゆっくり出来ただけだな。首都が京都だなんて、一度見ときたい。」

大学で民俗学の講義を受けたこともあった司には、首都となっている京都がどのようなになっているのか、興味津々であった。

「でも…金どうしよう…」

何よりも重要な問題があった。銀行にも行ったのだが、この時代に司の口座は無く、今の所持金が全財産となったのである。全財産2万円足らず、観光などとてもできる余裕はない。

「バイトしようにも履歴書とかどう書けばいいんだろう。住所なんてないし。というか、今日寝る場所もなんとかしないと。」

世界を征服どころか、消滅させる事さえ容易く出来てしまう力を持っているにも拘らず、庶民的な司であった。根は善人ある。

「とりあえず一度帰るか。蟲たちもほっとけないし。」

そう呟きトイレに向かう司。誰もいないのを見計って輸送アリにゲートを開けてもらい潜った。

潜った後の話であるが、司は化身をする事をすっかり忘れていて、宇宙空間に出たから慌てて気付いて化身したのである。生身で宇宙空間に出ても無事である事が証明されたが、「英雄の種族」を身に宿していなければ、そのままあの世であっただろう。

第三話 原作開始は2000年辺り、現在は・・・（後書き）

全財産2万円足らず。住所どころか、おそらく戸籍もない。これが個人的にも辛いスタートだと感じました。

コンビニや立ち読みお断りは私の勝手な判断なので、間違っていたらすみません。あの頃はそうだったと思う、という記憶で書きました。

軽くこの世界の情報収集を済ませた司。次は、自分の持っている力を確認する予定です。手加減を覚えないと、いろいろマズイので。

感想をくれる方々、ありがとうございます。これからもがんばりますので、どうかよろしく願います。

日本降伏の歴史のところを修正しました。無条件降伏したのはドイツでした。

第四話 戦闘の目的は（前書き）

今回ご都合的の塊です。ご容赦ください。

そして、やっていることは凄いのになんか淡々と説明するよつな形になっているので、盛り上がりには欠けます。

では、どうぞ。

修正しました。月には光線級や重光線級はないという設定にしました。

第四話 戦闘の目的は

第四話 戦闘の目的は

前回、地球に降りて判明したこと。

- ? 原作の約10年前
- ? 金がない
- ? 家が無い
- ? おそらく、戸籍も無い

結論：人間としてまともに暮らせない

宇宙空間でレルネーアに化身した司は、蟲を撫でながらいろいろ考え込んでいた。

【（いつたい、どうすればいいのだろう……戸籍が無くてもアルバイトはできる。寝る場所は蟲達のところに来ればいいけど、風呂に入れないのや着替えが無いのはきついな。どこか、住み込みのアルバイトなんかあるかな。俺、ホームレス街道に向かっている？）】

人間として、衣食住をどう得るかについて悩んでいた。自給自足をしようにもこの世界の地球にはそんな余裕のある土地はないである

う。

【（日本の政府、ここじゃ帝国か。保護を求めるにしても戸籍の無い20歳がいるなんて普通じゃないし、力で脅したら後々面倒だし。いっそ、侵略から始めて強奪しようかな……）】

まともな方法で行けば面倒な事になる確率が高く、簡単かつ確実な方法は侵略という結論になるが、元々お人よしな性格の所為で気持ちを固められずにいる。そんな無限ループに陥って、1時間。司は1つの決断を下す。

【（月に行こう）】

【ぶん！！】

拳を突き出し衝撃波を発生させ、襲い掛かってくるBETAを吹き飛ばすのではなく、跡形も無く消し飛ばす。

レルネーアより一回りは大きい要塞級が尾の衝角で串刺しにしようとするが、レルネーアはそのまま尾を掴み、投げ飛ばして他のBETAにぶつけてやる。衝角を飛ばしてきた奴はそのまま掴んで、繋がっている衝角の触手を引きちぎってやる。明らかに変な足は片側を全部蹴り折ってやったら、立てずにもぞもぞと動くだけの物体になった。その足は割り箸のようにポキポキ折れた。

サイのように突っ込んでくる突撃級は軽く蹴り飛ばすと、そのままボーリングのように他のBETAを弾きながら跳ぶ。思いつき蹴飛ばすと、蹴った衝撃が強すぎて柘榴のように飛び散ってしまったので、手加減して蹴る。

口のあるところが頭だと思っていた要撃級は、その部分を引っつかんで振り回して武器にしてやった。こいつはサソリのような体型をしていて、缺の部分がダイヤモンド以上の硬度を持っているらしい。その部分をハンマーのようにしてやれば、尾が千切れるまでなかなか使い勝手が良い武器になった。要塞級だと大きすぎたので、要撃級が丁度良い。

人の大きさに近い戦車級や闘士級は、ただうっとおしかった。なんだけかに群がられている気分である。蟲はうちのアリたちのほうがワイイ。振り落としても切りがないので、毒霧を振りまいてやったら細胞崩壊を起こしたようでどんどん落ちていった。周囲にいた他のBETAたちも同様に。ドロドロにとても原型が無い。即死したようであった。

一番危険だと思っていた光線級と重光線級なのだが、出てこなかったである。そうとは知らず当初は不安だったので、月に突入する際アリたちを引き連れて全方位にヘドローンの盾を出して防御に専念し、様子を見ていた。だが何時までたっても月面上でBETAたちもぞもぞ動いているだけで、レーザーの照射は受けなかったのである。後で知ったのだが、月に光線級たちはいないようなのである。人間の航空機に対抗して地球では光線級が生まれたのだが、月ではその必要が無かったためか、光線級といった遠距離方のBETAは作られなかったみたいである。

司はいま月にいる。月は月でも地球から見えない位置、月の裏側である。なぜここに来たのかというと、腕試しと食料確保である。

腕試し、というカレルネーアの力の把握は重要であった。なにせ攻撃の余波だけで星のひとつを吹き飛ばしかねない力である。手加減を間違えれば、地球を消し飛ばしてしまうだろう。それに、レルネーアの象徴ともいえる「猛毒にして万能薬」を使いこなさなくてはならない。地球で試そうものなら、それこそBETAよりも酷い被害になってしまふ。なので、人間が居らずBETAしかない月で試す事にしたのである。

もう一つの食料確保であるが、これは司の食料ではない。「青銅の種族」のアリたちが食べる食料確保であった。アリたちは有機と無機のハイブリットであり、なんでも食べられる。岩などの鉱石も食べ、栄養に出来るので、司はBETAを食料に出来ないかと考えた。これなら食糧確保にしばらくの間悩むことはないかと踏んだのである。また、アリたちの強さの把握やそれに伴う軍隊指揮の経験も積んでおきたいと思ったからである。アリはBETAと違い自由自在に飛ぶ事ができる。それを狙って光線級などがレーザーを撃ってくるが、ヘドロンを盾を展開し防ぎ、インターバルの間に襲ってしまえば圧倒的有利に立てると素人ながら仮説を立てた。

その仮説は元から失敗し、作戦は成功した。

月面ではアリたちがBETAを食い尽くすのではないかという勢いで襲い掛かっている。アリたちの大きさは約30メートルであり、BETAの要塞級の半分くらいである。要塞級はさすがに大きいらしく、3〜4匹で襲い掛かって貪り食っている。当然BETAも反撃しているのだがアリたちの外骨格は予想以上に硬いらしく、要撃級や突撃級が相手になっていない。逆に要撃級の硬い前腕を煎餅の様に、要塞級の足をポツキーのようにバリバリポリポリ食べてしまっている。要塞級の溶解液も効いていない。さすがに「黄金の種族」に答え、宇宙進出を果たした種族だけはある。

司はアリたちにいくつかの指令を出している。

1つは、絶えず攻撃を加え、攻撃を絶やさないう事。BETAに食い付いたらそのアリたちにBETAが攻撃を加えないように、別のアリたちが次の目標に襲い掛かる。その目標に食い付いたら、また別のアリたちが別の目標に襲い掛かる、という波状攻撃をしているのである。そのようにしてアリたちの食事の領域を広げるといふ無謀ともいえる戦闘方法もとっている。これは果てしない物量を持っている「青銅の種族」だからこそできる方法であり、後方には腹をすかせたアリたちが億単位で控えている。最初こそ厳しいかと思っていたが、今ではBETAの数がアリたちすべてに行き渡るかどうか心配になってきた。小型種を含めて10億匹のBETAがいたとしても、アリたちの数はそれ以上いる。アリ1体に対してBETA1匹だとしても全然足りないのである。

2つ目の指令は、高温プラズマを極力使わない事。

プラズマを使えばBETAを食料にする事どころか燃え尽きてしまう。さらに念のためプラズマをBETAに解析されないようにする

ために使用を制限したのである。禁止はしていないので、対処できないBETAが現れたときは使用を許している。

3つ目の指令は、4体1組で動くようにさせている事。

これは攻撃よりも防御を優先した結果である。ヘドローンの盾をアリ1体は一方方向にしか展開できない。しかし、地上戦に限定すれば4体いればヘドローンの盾をほぼ全方位に展開できるので、このような小隊を組ませるようにしたのである。

このようにひたすらBETAを駆逐するもはや単純作業になりつつあった時、地震が起き、巨大なBETAが現れた。母艦級である。それは全長1800メートル、全高176メートルにおよぶ超度級の大きさのBETAであった。それらがありたちの食事領域の中にそびえ立ち、その口を開け大量のBETAを吐き出そうとした。

レルネーアはその開いた口に毒霧を強めに吹き込んでやったら、紙風船のように破裂して中のBETAごと死んだ。

アリたちはその母艦級の身体にアブラムシのようにへばり付き、ひたすら齧った。すぐにチーズのように穴だらけになって、中のBETAたちが出てきたがそれらもすぐに食い殺された。

物量で恐れられるBETAが物量に負けたのである。

このように、月の裏側で「英雄の種族」と「青銅の種族」の猛威がBETAに対して振るわれた。一方的虐殺となり、BETAはひたすら捕食されていき、消し飛ばれていったのである。

レルネーアは「英雄の種族」のせいか、戦えば戦うほど衰えるどころか飢えも乾きも癒えていったという。

アリたちのBETAに対する評価は、なかなか栄養豊富で種によって硬さも栄養も違い飽きが来なくて好評だったと記しておく。ハイヴ最深部の反応炉のG元素は特に栄養価が高く、未知の物質によりアリたちの身体に変化が現れるかもしれないという結果になった。

3日ほど経って一度司たちは撤退したのだが、そのとき既に月のBETAの5割が食われていたという。最初はハイヴには入らずひたすら出てくるBETAを倒し喰っていたのであるが、そのうちBETAの出てくる数より司たちが倒す数ほうが上回り、アリたちはハイヴに入ってしまった。そして、月面の裏側だけであるがハイヴの壊滅し、ただの洞窟だけが残った。だがアリたちはまだ物足りなく、今回食事に参加できていないアリたちもまだまだ居るといふ。

第四話 戦闘の目的は（後書き）

BETA戦を淡々とこなしました。

今回ハイヴには入っておらず反応炉は破壊していません。すぐに月の頭脳級は対策に乗り出しますが、その対策が出来る前に司たちは動くでしょう。

「英雄の種族」は戦うほど飢えが癒えるや、「青銅の種族」が何でも食べられるのでBETAも食べられるということなど都合主義満載の話でした。もし観客があるのであれば、次回はもっと盛り上げようと思います。

駄文ですが、これからも頑張りますので、どうかよろしくお願いします。

第五話 運命の悪戯（前書き）

出来上がりましたので、投稿します。

前回で月のBETAを半壊させました。今回はその後です。戦闘はありませんが。ただ主人公も気付かなかった出会いがあります。

月にレーザー種がいるのかいないのか、今検討中なので、場合によっては修正していきます。

「青銅の種族」が人類に観測された場面を修正しました。人類が称した名前は、思いつきリネタです。

第五話 運命の悪戯

第五話 運命の悪戯

1990年8月 夏

ペコリペコリ

パン パン

ペコリ

二礼二拍手一礼、これが正式な神社での参拝の手順である。なぜ神社での参拝方法を説明しているかというと、今実際に司が大きな神社で参拝をしているからである。

現在は夏真っ盛りの8月。世間では夏休み。ユーラシア大陸では人類とBETAとの激戦が繰り広げられているが未だ日本は何処吹く風である。

現在、司は以前地球に転移して来た時と同じ四国に居る。ここに何をしに来たかと言うと、観光をするために来ているのである。他にも温泉や名物などを堪能し、九州・沖縄を廻り京都まで行く予定を立てている。本当は旅行らしくバスや電車で行きたかったのだが、予算の都合上輸送アリの転移で行く事になった。

そしてなぜ暢気に観光をしているかという点、月のBETAを一掃し、月のハイヴを利用したアリたちの拠点の構築が終わったからである。

月のBETA殲滅は一週間ほどで完了した。最初の三日間で月のBETAの五割を喰った後、一日休憩を挟んですぐに襲撃をかけた。その際、月面での目印のためハイヴのモニメントには手をつけないように指示を出しておいた。

司たちにとっては軽い気分での襲撃であったが、襲撃されるBETAたちにとっては正に最後の日であった。たった一日で再び襲撃をかけたためBETAの方の補充が間に合わなかったのもあるが、アリたちの勢いがそれ以上に凄かったのである。

前回の戦闘でBETAが予想外に美味だったのか、凄い勢いでアリたちが襲い掛かった。その時参加したアリたちは前回BETAを食べる事が出来なかったアリたちで、我先にとBETAを平らげているのである。喰うのもBETAだけに止まらず、ハイヴにもどんどん侵入し、反応炉（頭脳級）や生産中のBETA、果てはハイヴ内の壁まで食い尽くしていった。その時の様子は、シロアリなど比べ物にならないほどだったと司は思った。途中慌てて司は月のオリジナルハイヴの重頭脳級と、そこまでの道は残すように指示を出したくらいである。そうしたら、本当に残ったのは重頭脳級への一本の道と重頭脳級、そして重頭脳級の居る大広間だけであった。アリたちはオリジナルハイヴのBETAどころかハイヴの内壁、さらには重頭脳級の大広間を塞ぐ門級まで食い尽くしたのであった。

つつすら光るハイヴの壁を明かり代わりにアリたちと進みながら、

レルネーアに化身した司はこの月のボスの元へ向かう。地球で最大のハイヴは、地下4000メートル以上の地点に重頭脳級の大広間がある。月のオリジナルハイヴはそれ以上だと考えていいだろう。重頭脳級の大広間に着くまでかなりの時間がかかってしまい、着くまで気を張り詰めさせていたことが今までで一番辛かった。

アリたちを残して大広間に入ると、ものすごく大きなオブジェのようなものがあり、その頂上に重頭脳級がいた。何か話しかけてきたようであるが、伝わらないと理解したのか触手で攻撃してきた。しかし、指揮や補給担当BETAの攻撃が要塞級以上のものである筈がなく、レルネーアに傷をつけることなど不可能であった。

【これが、人類を滅亡寸前まで追い込んだ存在で、尖兵か。俺にとつてはこんなにあっけない存在なのだな】

レルネーアの拳が重頭脳級を消し飛ばし、月のハイヴ、及びBETAは居なくなった。一つの星の侵略が成された瞬間であった。

その後、司は月をアリたちの住処にするよう命令を出した。自身の住居スペースも何とか作れないかと思えば粗大ゴミから家具を拾い再利用し、四苦八苦しながらも部屋となるものを作っていたのである。

この日以降、月を観測している衛星から一つの報告が人類に届けられた。月においてBETAを襲う新たな地球外生命体が観測され、その数はBETAと同等かそれ以上であると推測された。後にその地球外生命体はBETAとは異なる存在と認識され、外観が地球上の芋虫に似ているところから

Terrible
Monster
Caterpillar

訳すと「宇宙怪虫」、略してSTMCと称された。BETAを圧倒するこの存在が人類の敵かどうか不明であるが、敵ならば地球は終わりであるということは間違いないであろう。

「やっぱり神社とかは良いね。人気が無いから正に聖地って感じがするよ」

司が今居る場所は、この神社の奥の境内である。この神社は山の中に建てられていて、一番参拝客が多い本殿が眺めの良い場所に奉られている。それより奥に小さな祠がいくつもあるのだが、司が一番奥の祠まで来たのである。ここは本殿からかなり離れているため、ここまで来る参拝客はほとんどいない。それに、山の奥の方にあるので涼しく快適な場所であった。

「誰もいないなら、いいよな」

司は携帯電話を取り出し、音楽を鳴らし始めた。

「色は匂えど いつか散りぬるを さ迷ふことさえ 許せなかつた」

「咲き誇る花はいつか 教えてくれた 生きるだけでは罪と」

やっぱり良いよな、『東方Project』は。こつこつ神社で聞くと、幻想郷が本当にどこかにあるんじゃないかって思えてくるよ。

「健気に咲いた 刹那の美しさ それを知るには 遅すぎたのか もしれない」

こつこつ聞き聞くと感慨深い歌詞だよな。ただ生きるだけでは罪、枯れ逝く命よ儂く強くあれ、現代社会とは隔離された幻想郷だからこそ、人が忘れていた大切な事を思い出させてくれるのかも。

「次は何をかけようかな」

次にかける曲を選んでいたら、

「良い歌ね。何の歌？」

突然話しかけられた。曲に夢中になっていたせいかな、人が来たのに気付かなかった。声のした方に顔を向けると、長い黒髪をした女性だった。年齢は見たところ、高校生か大学生くらいだと思う。妙に大人っぽくて目つきが鋭いのが印象的だった。加えるなら俺は確実に年上の筈なのに、やけに偉そうだった。

「これは元々ゲームの歌でね。あんまり有名じゃないんだけど、自分は凄く気に入ってる歌なんだ」

俺はそう答えた。自分は観光できた事を伝えたと、彼女は友達と旅行で来たのだと答えてくれた。彼女は俺の持っていた携帯電話にものすごく興味を持った様だった。この時代では最先端以上の技術が盛り込まれた代物である。澄んだ音を奏でる事が出来るものが電話であったことを知ると、なお興味深そうに観てきた。

「もし、こことは違う世界があるとしたら、あなたはどう思う?」

いきなりそんな事を言い出すので答えに困った。なぜだろう、文芸部とかSFクラブとかに入っているのか?というか、自分が正に違う世界の人間だし。

「違う世界か。そんなものはいくらでもあると思うぞ」

「なぜそう思うの?」

「どう異なるのかにもよるけど、違う世界というIFの世界。つまりパラレルワールドはあるかってことだよな?」

「そうね」

「未来はいくつも分岐して其々の歴史を歩んでいる。今こうして俺達が話している歴史もあれば、会わなかった歴史もあるだろう。小さな事だけど、もしその出来事が後々の世界を大きく変える切欠になったなら、その世界は別の歴史を歩む。そう考えれば、世界は本当にいくつもの形を持っていると俺は思う。更に言うなら、その世界は普通なら行く事はおろか知ることもお出来ないけど、なんらかの

条件を満たした者は知ること、行き来することもできるんじゃないかって思っている」

「その条件は？」

「なんだか恐いな、この人。学者体質なのかな。目が一層鋭くなっている。」

「すまないけど、そればかりは分からないよ。でも、世界のあり方によってはその条件も違うんじゃないか、と俺は思う」

「どうということ？」

「世界の位置かな。違う世界は平行世界だけじゃない。上位世界や下位世界というものもある。例えるなら、本の世界。その本が一般的にある世界からしたら、観測できる世界の事は自分の世界より下にあると位置づけられる。その逆だと、自分の世界が下位となる。で、横に移動するより上から下に移動したほうが楽なんじゃないかっていう勝手な持論なんだけどな」

「考え込んだよ、この人。何か思い当たるのかな。」

「その移動できる切欠は何だと思っの？」

「切欠といっても様々だと思うけど。よくあるパターンだと強い思い、かな。その思いに引っ張られて違う世界の人間が来る、なんてことはよくフィクションでもあるよ。その来た人が実はその世界と繋がりがあった、なんてことも多いけど」

「運命や因果っていうものかしら」

「まあ、そういうものがあれば切欠になりやすいとは思っよ」

そんな話を俺は続けた。実は、このように人と話して論議を交わすのは久しぶりで少し楽しかった。この世界に来て基本アリたちと過ごし、人と接する事なんてほとんど無かった。自分から避けていた理由もあるが。彼女も理系向きなのか、自分とは意外と話があった。かなり偉そうな口調だと最初は思ったが、それ相応の知識を持っているからだと返って納得してしまった。しばらく話をしてから彼女とは別れた。別れた後で名前を聞くのを忘れていたのを思い出した。まあ、もう会うことも無いだろう。

Side - ??? -

今日は興味深い話が出来たわ。あんな見解を持っている人が居たなんて。斬新な理屈だったと思っただわ。それに、あの携帯電話だったかしら。あんなものを持っているなんて。あの大きさで最新のコンピュータ並みの性能を持っている。そんな高性能で小型の機械を持っているなんて、普通の人間ではない事は確か。

「どう？気分転換になった？」

声ののした方を見ると、私の親友が茶店で待っていた。

「ええ。とても有意義な時間になったわ。これで私の論文もより完

成度が増しそうよ。ありがとう、まりも」

「なによ、お礼なんて。貴方らしくないわ、夕呼」

第五話 運命の悪戯（後書き）

出てきたのは若かりし頃の香月博士と神宮寺軍曹でした。1988年で14歳なので、1990年では16歳、まだ2人は高校生の時代です。量子論の論文を検証し、少し行き詰まっているので気分転換に旅行に来た、という設定でした。

ゲームでは紫やピンク、蒼の髪の毛が普通に居ますが現実になるとありえない色なので、黒髪、茶髪、金髪の系統にしてみました。そうすれば自然な髪色になるので、主人公も相手が香月夕呼だと気づきませんでした。

この世界は戦争中なので娯楽があまり発達していないので司の見解が新鮮であった、という設定です。

次回も更新頑張ります。どうかよろしくお願いします。
どう展開させるか、まだ決めていませんが。

第六話 オルタネイティブ3（前書き）

大変遅くなってしまって申し訳ありません。

これからはもっと速く更新できるようにがんばりますので、どうかよろしく願います。

今回の話は短いですが、ただの状況説明だけになっています。

あと、第四話を修正して、光線級は月にはいないという設定にして書き直しました。そちらもよければ、どうぞ。

第六話 オルタネイティヴ3

第六話 オルタネイティヴ3

オルタネイティヴ計画。その目的はBETAとのコミュニケーション方法を模索する事である。

オルタネイティヴ1では、BETAの言語・思考解析による意思疎通計画であったが、まったく説明する事ができず失敗した。

オルタネイティヴ2では、BETAを捕獲しての調査・分析計画をしたが、莫大な犠牲を払って分かった事は、BETAが炭素生命体である事だけであった。

オルタネイティヴ3は、1973年のBETA地球襲来をきっかけにスタートした。ESP能力者によるBETAとの意思疎通、情報入手を行う計画である。リーディングには成功しBETAにも思考があることが証明された。だが、ハイヴ突入に関する能力者の帰還率6%。BETAに対してのあらゆる訴えはまったく無効であった。この計画の第6世代目に「社 霞」誕生した。

このオルタネイティヴ3のリーディングによる情報収集が成功したのは、1992年における印度、インド亜大陸反攻作戦・スワラージ作戦といわれている。オルタネイティヴ3直轄の特殊戦術情報部隊が地下茎構造に突入、リーディングによる情報収集を試みるも成果はなく、ほぼ全滅した。この時生き残った1人が、トータル・イクリプスの登場人物の1人であるクリスカ・ビャーチエノワという説もある。

つまり、1990年の時点においてはハイヴ突入によるリーディングは行われていないのである。本来ならそのような歴史を辿る筈だったのだが、この世界に存在するイレギュラーのおかげで人類の進

む歴史に変化が生じてきていた。

司が「青銅の種族」を率い月のBETAを壊滅させ、月を拠点にしたのが1990年の2月。この時点で地球のBETAの勢力範囲はユーラシア大陸全域にはまだ達していない。しかし、ヨーロッパはほぼ全域が支配され、ソ連や中国にも侵略が開始されるのは時間の問題であった。

地球に届けられた月のBETA壊滅の報告は世界各国に激震が走った。当然である。人類が20年以上戦い続けて勝てないでいた存在が、たったの1週間で滅ぼされてしまったのだから。月は地球より小さいとはいえ、地球より遥かに大きなハイヴがあり、地球以上の数のBETAが居たはずである。なのに、そのBETAを圧倒する存在が現れた。それもBETAより強靱なだけでなく、BETA以上の物量による殲滅戦を仕掛けてくる。

もし、そんな存在が地球に矛先を向け人類と敵対することになれば、BETAごと人類が狩りつくされてしまうことが容易に想像できた。「青銅の種族」という事を知らない人類は、その存在に次のような名称をつけた。

Space : 宇宙の

Terrible : 非常に危険

Monster : 怪物

Caterpillar : 虫

「宇宙怪虫」、略して「STM C」である。人類と敵対するかどう

かは不明なため、BETAとは異なりこのような名前が付いた。またBETAほど醜悪でないことに加え、外見が芋虫に似ている事からであった。(思い切りスパロボからのネタです。最後の【C】は違いますが。)

司と若かりし頃の香月夕呼が出会う前の1990年3月のこと

「いったいあれはなんなんだ!!?」

「BETAを圧倒し、食い尽くしてしまう存在なんて」

「非常識にも程がある!それになんだ、あの数は。BETAをも上回るというのか…」

「もし、あれが地球に来る事になったら」

「早急に対応すべきだ!!」

「しかし、どうやって!!?BETAより強力なやつらなのですぞ!下手に手を出し、敵と認識されでもしたら…」

国連は各国の代表が集まった組織である。アメリカの影響力が強く傀儡と化しているが、今回の事件は国がどうというレベルを脱していた。もしあれが地球に来る事になったらどこに来るか分からない。当然アメリカ大陸にも襲来する可能性があり、もし襲来すればまた核のような戦略兵器で滅ぼさなければならぬ。G弾の実験は

成功し使えるようにはなっているが、それでも土地に影響が残ると
いう点は同じ。なので、自国に向けて使うというのは避けたい事態
である。

混迷を極めた会議であったが、各国の欲しいものは何よりも情報で
あった。地上の望遠カメラからの映像しか情報が無かったため知り
えた情報は、BETAが謎の生命体に襲われ月はその生命体の支配
下になったこと。その強さと物量はBETAを圧倒する事。

外見から「虫」に似ている事からSTMCと名づけたが、STMC
の目的、規模、強さ、特徴、種類など圧倒的に情報が不足している
のである。

正確な情報を手に入れるため、まず月に無人監視衛星を送り込む
事が決まった。無人監視衛星を送り込み、STMCの生体を調査す
るのである。最初は月の軌道上から監視する事から始まった。衛星
に攻撃をしてこないのであれば、今度は直接月面に送り込むこと
になっている。たとえ撃墜されたとしてもSTMCの攻撃手段などの
情報が少なくとも得られるとし、自国にハイヴがなく余裕があるア
メリカが中心（ロシアや日本も協力）となり、建前のため国連の名
義で送り込まれることとなった。今回の件で今後の発言権の増加な
ど絡んでくるが、実際自国にハイヴを抱える国は資金にも人材にも
余裕がなく、こうならざるを得なかった。

1カ月後

急ピッチで監視衛星を送り込んだが、月のSTMCに対する情報

収集は順調であった。月の軌道上ではS T M Cが襲い掛かってきて衛星が破壊されるといふような事はなかった。S T M Cが積極的に攻撃してくる事はなかった。だが、人類は知らないほうが幸せだったかもしれない情報を得てしまった。

月の衛星軌道上で監視をしていた探査衛星が、地球からでは観測できない宙域で何かの影を見つけたのである。それがただの小惑星群であったならばどれだけ幸せだったであろうか。

その見つけた影の周囲にS T M Cを発見。その1つの小惑星を拡大してみると、S T M Cが埋め尽くすほど居るのである。他の小惑星も拡大し調べてみたが、どれもS T M Cがいる。そして、その小惑星が無数にあるのである。それを確認した管制官たちは、それがS T M Cの集合体であると理解しながら、理解できなかった。目測でも万どころか億を超えるS T M Cの軍団が地球の近くまで来ているのである。もし、あの軍団が一斉に地球に襲来すれば…

この情報はすぐさま各国の上層部に通達された。これに各国は悪い冗談だ、といった心境であったが観測された映像を見た者たちは言葉を失った。地球どこるかまさに宇宙を埋め尽くすような軍団が地球のすぐ傍にいるのである。各国はS T M Cの情報収集をB E T Aと同レベルの重要事項とし、S T M Cが地球に襲来という最悪のシナリオをどう回避するかということを入れておかなければならなくなつた。

この重大な事実が各国に知れ渡って数ヶ月、オルタネイティヴ計画にも大きな転機が訪れようとしていた。B E T Aに続いてS T M Cの存在の確認。これにより、ロシア主体で行われていたE S P能力者によるB E T Aとの意思疎通にS T M Cも対称にする事となつた。そして、B E T Aに対しハイヴにE S P能力者の特殊部隊を突入させる計画に加え、月のS T M Cに対しても有人ロケットに少数精鋭の部隊を乗せ、月軌道上を超え、月面での情報収集を行う計画

が進められた。

この計画の帰還率は、地上において10パーセントあるかどうか、月に關しては無理であろうとされた。しかし、もうロシアにも後がなく、国土も着々と侵略されている状況を好転させる手はなかった。この計画で、ESP能力を持つ者で充分に使えと判断された者は全て投入される事になった。準備の關係でこの計画は歴史の通り1992年に行われることが見込まれた。ただ、宇宙に打ち上げられる部隊はまず生存が絶望的だということもあり、ESP能力が高く宇宙での行動に耐えられるのであれば、子どもであろうと投入される事となった。

その部隊の名前の中に、とある2名の名前があった。

地上部隊の中には、クリスカ・ビーチエノワ。

月面突入部隊の中には、イーニヤ・シエスチナ。

本来であれば、部隊に組み込まれる事のなかったイーニヤ・シエスチナは、新たな歴史の戦場に望む事になった。月面突入の詳しい作戦は公開されず、クリスカ・ビーチエノワも守ろうと心に決めたイーニヤ・シエスチナが帰還率ゼロの作戦に参加させられていたことを知ったのが、作戦が失敗に終わり、わずかな帰還兵と共にロシアに帰ってきてからだだったという。

第六話 オルタネイティヴ3（後書き）

今回登場したトータル・イクリプスのヒロイン達。状況説明だけですが、次回月面突入作戦の内容を書こうと思っています。オリジナルなので粗も多くなると思いますが、よろしく願います。

更新が遅くなって、本当にごめんなさいです。

また遅くなるかもしれませんが、他の作品共々よろしく願います。

第七話 最大の衝撃？（前書き）

またまた大変おそくなりました。それなのに、ほとんど進んでいませんし、内容も薄いです…

矛盾もあるかも…

どうぞ。

第七話 最大の衝撃？

第七話 最大の衝撃？

1992年に行われた印度、インド亜大陸反抗作戦・スワラージ作戦においてオルタネイティヴ3直轄の特殊戦術情報部隊が地下茎構造に突入し、リーディングによる情報収集を試みるも「BETAは人類を生命体と認識していない」というが分かっただけで、帰還率6パーセントとほぼ全滅した。

この作戦と同時に行われた作戦がもう一つある。新たに観測されたSTM Cに対しリーディングを行うというのがこの作戦の目的である。これまで月面のSTM Cに対する観測衛星の調査によりSTM Cのことについていくつか判明した。

- ? STM Cはアリのように地下に住処を構築している
- ? BETAと違い月面に限らず自由に宇宙空間を移動できる事から、単独でも航続能力を持っている
- ? 総数は億を超えると推測される
- ? 緑色の高熱の炎を吐き、それは岩をも溶かすほどである
- ? 白色の盾のようなものを出し、攻撃を防ごうとする

このように生態や攻撃方法などはある程度情報を得ることができたのだが、STM Cの意思の有無や目的など、肝心なことが何一つ分かっていない状態であった。捕獲を行おうにもSTM Cは現在宇宙にしか存在が確認されておらず、その大きさも最小のものでも20メートル以上あるので、捕獲しようとするばとんでもない被害がでてしまう。

そこでリーディング部隊を1つだけ月に向かわせる事が決定した。

だがこの作戦において、作戦部隊の帰還は地上のハイブ突入部隊以上に絶望的であることが作戦開始前から分析されていた。宇宙空間で攻撃を受ければ少しの損傷でも命取りになる。宇宙に投げ出されれば自力での帰還はほぼ不可能。さらに言えば、地上と違い宇宙での作戦では整える装備も莫大な予算が必要であり、少数精鋭による作戦となった。一応帰還できるだけの設備は整ってはいるが、STM Cを倒せる装備ではないことは明白であった。

この部隊の白羽の矢が立ったのが未だ10歳にも満たないイーニヤ・シエスチナであった。彼女は幼いながらも強いリーダーシップを持っており、まだ戦術機の高い適性を持っていたことで宇宙での作業も充分可能であると判断されたのである。年齢の問題もあったが他に該当するものがないこともあり、彼女に加え、三人の熟練兵士がこの部隊に選ばれた。熟練といってもほぼ退役といってもいい年齢であり、この作戦が帰還することが絶望的であることがもとより承知であった。よって、出来る限りの願いを叶えることが軍から許された。自然食材をたらふく食べたい、残る家族に十分な生活を約束して欲しい、最後に仲間と派手に騒ぎたい…

そして、この部隊は地球を旅立った。

Side 司

「えっと………これどうしよう?」

今、目の前に宇宙服に身を包んだ人間が居る。宇宙服はかなり頑丈なタイプのようなが、明らかに小さい。まるで、子ども用である。

ここ数年日本中の観光地や隠れた名所を巡り温泉などを満喫していたが、アリたちからいつもと違った連絡が来たのである。月を制圧して以来、なにやら監視衛生らしきものが周りをブンブン飛び回っている事はアリたちから聞いていた。攻撃を受ける、または巣や部屋の中に入ってこない限り、放っておくようにしていたのである。時々アリの巣に入り込もうとする衛星がいるのでそれは撃墜し、たまにアリたちの軍事演習に巻き込んで落としてしまうこともあったが、基本放っておいた。

今回も衛星が近づいてきていると連絡を受けた。特に気にする必要もないだろうと思い放置したのであるが、どうやら巣に入り込もうとしたようでアリたちが迎撃に動いた。その衛星は逃げようともせず、そのまま撃墜された。本来ならそこで終わったのであるが、巣の入り口付近にすでに着陸していた機械があった。どいやら、その衛星から分離した探査用衛星らしい。その探査用衛星も帰還する動きを見せなかったので、アリたちが食べようと食いついた。そうしたら、中に人間が乗っていることにアリが気付き、連絡が来た。今まで無人衛星ばかりであったため、人間が乗り込んでいたことにはものすごく驚いてしまった。おそらくその前に撃墜した衛星にもおそらく人が乗っていたであろうことも。温泉から出て涼んでいた自分は荷物も置いて月の自宅まで帰った。

帰った自分の部屋には、宇宙服を着た人間がプカプカ浮いていた。どうやらアリたちがここまで運んでいたらしい。「他に人間はいなかったか？」と聞くと、見つからなかったらしい。「乗ってた衛星は？」と聞くと、食べた！！と言ってきた。そりゃもう嬉しそうに。

こいつら個体はあまり意志を持っていなかったはずなんだけど、個

性がでてきたか？それに、雑食性も上がってきている気がする。そのうち溶岩さえも喰い出しそうだ。いつも片付けが面倒だから食って良いって言うてるけど、こういう時は置いておいて欲しかった。

食べてしまったものは仕方がないとして、この人どうしようか。

いくらこの世界の科学が進んでいるといっても、このまま何日も酸素が持つわけではない。ガンダムの世界でもそんな宇宙服無さそうだし。鼓動が聞こえるから生きている事は間違いないけど、このままじゃ死ぬ。

悩んでいると、なにやら宇宙服の人が動いた気がした。意識が戻ったのかと思つたが、ジタバタし始めた。喉を掻き毟るような動きをして、苦しそう。

とにかく、ヘルメットの遮光バイザーだけ開けてみた。すると、相手は見た目の大きさの通り、小柄な銀髪をした女の子だった。少女といつてもいい年齢であった。少しの間、某然としていると相手の動きも止まった。顔を覗き込むとぐったりしている。顔色も悪い。恐怖によるパニックか酸素不足かは分からないが、このままだとマズイと思つた。

このまま死なれるのも目覚めが悪いと思つて、すぐさま輸送アリアにゲートを開かせ、地球に向かった。

地球・日本の温泉町

地球に着いて、司は自分が泊まっていた温泉宿の部屋にこの子を連れて来た。とにかくヘルメットを脱がそうとしたが、脱がし方が

分からない。宇宙服だけあって、簡単に外れないようになってい
外し方を探している余裕もないので、ヘルメットの顔の部分を毒霧
で溶かした。もちろん手加減をして。うまく顔を傷つけずに溶かす
事ができ、女の子は呼吸が出来るようになった。

「さて、これで大丈夫だとは思うけど。この子どうすればいいんだ
ろう」

宇宙服が破損し、乗っていた衛星も消滅。このまま宇宙に連れて
行けば即死である。

「（パーパ）…」

「ん？」

司が彼女の顔を見ると、目が開いているのが分かった。どうやら
気付いたようである。

「目、覚ましたんだね。気分とか大丈夫か？」

相手はまだ子どもと言ってもいい姿なので、できるだけ優しい声
をかける。格好は厳つい宇宙服であるが。

「（パーパ）！！」

「へ？」

その少女は司を見るなり動こうとした。だが、動けなかった。重
力下では宇宙服はそれなりの重量があり、非力な子どもではとても
満足には動けないのである。

「（パーパ）！」

（パーパ）！」

「なに？パーパ？」

いきなりパーパと言われて戸惑う司。初対面の、しかも外国人の少女からいきなりパーパと言われたら、さすがに驚くであろう。だが、その女の子は必死に司に手を伸ばそうとしている。

「やだ！やだ！！パーパ！！パーパ！！！」

その姿に思わず手を差し出す司。見えないところで死んでいく兵士は無視できても、目の前で泣き叫ぶ子どもを放っておける事はできなかった。

以前にも記したが、司は情が深く、お人好しである。なので、そのまま突き放す事ができなかった。

「パーパ……」

手を握ると安心したのか、女の子はそのまま気絶するように眠った。

「……とりあえず、この宇宙服脱がすか。時間かければ、なんとか脱がせるだろう。しかし、なんでパーパ？俺、そんなに老けているのかな」

宇宙服の脱がし方を手探りで行いながら、いきなりパーパと呼ばれた事に戸惑いとショックを受けた司であった。そのショックは何気に、BETAとの戦いより強かったかもしれない。

やはり、最後の敵は人間となる予兆なのか？（関係は無さそうだけ

ど、敵になるのは有得る)

第七話 最大の衝撃？（後書き）

なかなか筆が進みません。展開は考えてはいるのですが、実際に文にするのがものすごく難しいです。

ポツポツ地球にアリたちの住居を構えていこうと考えています。加えて、イーニヤの扱いですが、娘にするにしても生身では弱すぎますので、ちよつと魔改造を。

あと黙示録の方ですが、最新話を修正するつもりなので、かなり展開が変わります。私も読み直して、これはちよつと、と自分で思ってしまったので。

展開としては、変身します。

また何時更新できるか分かりませんが、どうかよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1807r/>

マブラヴ Unlimited - 英雄の侵略者 -

2011年7月8日22時27分発行